

邢窯出土唐三彩の調査

はじめに 都城発掘調査部は、中国河南省文物考古研究所と、鞏義市所在の黄冶窯、白河窯およびその出土遺物に対して「鞏義市黄冶唐三彩窯跡及び産品に関する共同研究」を継続的に実施している。現在は第Ⅲ期5ヵ年計画を実施中で、これまでの成果を基に、より総合的な調査研究の実施を企図している。2010年度には、関連資料として陝西省銅川市黄堡窯と西安市醴泉坊窯出土遺物の調査をおこなった。鞏義窯産の唐三彩との異同に関して詳細な観察をおこない、その結果、特に醴泉坊窯出土品はその形態や技術的側面まで類似する点があることを改めて確認することができ、有意義な成果が挙げられた。

唐三彩を焼成した窯には、他に河北省に所在する邢窯がある。2011年度は、共同研究の一環として、邢窯出土唐三彩に関して調査を実施した。

邢窯の沿革 邢窯は河北省内丘県・臨城県を中心とし、南は邢台市までの広い範囲にまたがる一大窯址群である。邢窯の歴史は北朝にはじまり、その後は隋唐から宋、金、元代にまでおよぶ。その存在は古く『新唐書・地理志』にみえ、邢州にて磁器を産することが記されている。しかしこの邢窯は、内外で出土する白磁の産地として著名であったものの、その所在地が長らく不明であった。「邢窯之謎」を破る窯址群の発見は1980年のことで、その後の調査の進展により、これまでに20箇所以上の窯址が発見されてきている。唐代におけるその産品の主力は、むしろ白磁であるが、近年の踏査・発掘調査により、唐三彩の焼造も判明しつつある。その一例が、内丘県の城関遺址である。この城関遺址では、1985年に三彩の堆積が3箇所を確認されたといい¹⁾、その後の発掘調査でも唐三彩の出土をみた²⁾。こうした調査により、これまでに知られた器種には三彩杯、盤、鉢、三足炉などがある。近隣の唐墓からの出土例もあわせると、これらに玩具、鎮墓獸、三彩俑など明器の一群がくわわる可能性があり、邢窯焼造の唐三彩は現在解明の一途にある。

唐三彩の調査 さて今回の訪中では、上記のとおり邢窯出土唐三彩の調査というのが目的のひとつであったので、2011年11月25・26日に河北省臨城県、内丘県、邢台市に赴き、現地の見学と出土資料の調査をおこなった。

ことに内丘県の文物管理所における唐三彩の実査は、たいへん有益であった。まずは臨城・内丘県境の瓷窯溝窯(明代の黒釉窯)を見学し、続いて山下東窯址などを踏査。これらを巡見ののち、内丘県の文物管理所へ向かう。内丘県普利寺の文物管理所では、邢窯発見の施釉陶器・白磁・窯具などをつぶさに実見する機会に恵まれた。

実見した唐代の施釉陶器は十数点で、このうち三彩には水注、三足炉、鉢、二彩杯がある。それらの特徴は次の通り。

①三彩釉には緑釉・白釉・黄釉があり、一部に藍釉を併用した例がある。これらで三足炉や水注などを飾るが、ほかに緑白二彩の杯もある。水注には肩部に円形の貼付文がある。②三彩は素胎が赤味(いわゆる粉紅色)を帯び、施釉部分にのみ白色の化粧土を塗布する場合が多い。三足炉や水注では、内外面ともにうつわの下半まで化粧土がおよぶことはなく、底部は素地の淡紅色をそのまま見せている。つまり、邢窯三彩の素胎は一般に淡紅色を呈するので、白色の化粧土を塗布する場合が多い。もっとも素胎の色調に関連して、胎土中の酸化鉄(Fe_2O_3)を定量分析した結果によれば、邢窯三彩は河南鞏義窯や陝西省出土の三彩とそのレンジがほぼ一致し、色調の幅も大差ないとする報告もある³⁾。③焼成時に用いた支焼具は三叉トチンである。三彩鉢の見込などに目跡が残る。三足炉には口縁端部に目跡をとどめる例があった。

上に掲げた邢窯三彩の特徴は限られた資料のそれであるし、また同時に唐三彩の一般的特徴ともいえる。ただ印象をいえば、河南省鞏義窯の産品よりは赤味が強いのが邢窯三彩の特徴であるかもしれない。こうした発色の唐三彩は日本出土例になく、今のところ日本出土唐三彩の一産地として、邢窯をその候補にはくわえがたい。ことに陶枕の類は発見例が少ないようなので、比較対象としてはこうした類例の増加が欠かせないものと思われる。今後の調査に期待したい。

(森川 実)

註

- 1) 内丘県文物保管所「河北省内丘県邢窯調査簡報」『文物』1987-9。
- 2) 河北省文物研究所等「邢窯遺址調査、試掘報告」『考古学集刊』14、2004。
- 3) 楊文山「邢窯唐三彩工芸研究」『中国歴史文物』2004-1。